日蓮大聖人御書全集

にちみょうしょうにんごしょ

日妙聖人御書

新版
1678
〜
1683

日妙聖人御書

文永9年（'72）5月25日　51歳　日妙

過去に楽法梵志と申す者ありき。十二年の間、多くの国をめぐりて如来の教法を求む。時にすべて仏・法・僧の三宝一つもなし。この梵志の意は、渇して水をもとめ飢えて食をもとむるがごとく仏法を尋ね給いき。

時に婆羅門あり。求めて云わく「我、聖教を一偈持てり。もし実に仏法を願わば当にあたうべし」。梵志答えて云わく「しかなり」。婆羅門の云わく「実に志あらば、皮

をはいで紙とし、骨をくだいて筆とし、髄をくだいて墨とし、血をいだして水として書かんと云わば、仏の偈を説かん」。時にこの梵志、悦びをなして、彼が申すごとくして、皮をはいでほして紙とし、乃至一言をもたがえず。時に婆羅門、忽然として失せぬ。この梵志、天にあおぎ、地にふす。仏陀これを感じて下方より涌き出でて説いて云わく「如法応修行。非法不応行。今世若後世、行法者安穏（如法をば応に修行すべし。非法をば応に行ずべからず。今世もしは後世、法を行ずる者は安穏なり）」等云々。この梵志、

須臾に仏になる。これは二十字なり。

昔、釈迦菩薩、転輪王たりし時、「夫生輒死。此滅為楽（夫れ、生まれて輒ち死す。この滅を楽となす）」の八字を尊び給う故に、身をかえて千灯にともして、この八字を供養し給い、人をすすめて石壁・要路にかきつけて、見る人をして菩提心をおこさしむ。この光明、忉利天に至る。天の帝釈ならびに諸天の灯となり給いき。

昔、釈迦菩薩、仏法を求め給いき。癩人あり。この人に向かって「我、正法を持てり。その字二十なり。我が癩病

摩抱舐ひりょうさんきんにく与と

をさすり、いだき、ねぶり、日に両三斤の肉をあたえば説くべし」と云う。彼が申すごとくして、二十字を得て仏になり給う。いわゆる「如来証涅槃、永断於生死。若有至心聴、当得無量楽（如来は涅槃を証し、永く生死を断じたもう。もし至心に聴くことあらば、当に無量の楽を得べし）」等云々。

昔、雪山童子と申す人ありき。雪山と申す山にして外道の法を通達せしかども、いまだ仏法をきかず。時に大鬼神ありき。説いて云わく「諸行無常。是生滅法（諸行は無常

なり。これ生滅の法なり）」等云々。ただ八字ばかりを説いて後をとかず。時に雪山童子、この八字をえて悦びきわまりなけれども、半ばなる如意珠をえたるがごとく、花さきて菓ならざるにたり。残りの八字をきかんと申す。時に大鬼神云わく「我、数日が間飢饉して正念を乱る。ゆえに、後の八字をときがたし。食をあたえよ」と云々。時に童子問うて云わく「なにをか食とする」。鬼答えて云わく「我は人のあたたかなる血肉なり。我、飛行自在にして、須臾の間に四天下を廻りたずぬれども、あたたかなる血肉得がたし。

人をば天守り給う故に、失なければ、殺害することかたし」等云々。童子云わく「我が身を布施として彼の八字を習い伝えん」と云々。鬼神云わく「智慧はなはだ賢し。我をやすかさんずらん」。童子答えて云わく「瓦礫に金銀をかえんにこれをかえざるべしや。我いたずらにこの山にして死しなば、鴟梟・虎狼に食われて一分の功徳なかるべし。後の八字にかえなば、糞を飯にかうるがごとし」。鬼云わく「我いまだ信ぜず」。童子云わく「証人あり。過去の仏もたて給いし大梵天王・釈提桓因・日月・四天も証人にたち給うべし」。こ

の鬼神、「後の偈をとかん」と申す。童子、身にきたる鹿の皮をぬいで座にしき、踞跪・合掌して「この座につき給え」と請ず。大鬼神、この座について説いて云わく「生滅滅已、寂滅為楽（生滅滅し已わって、寂滅を楽となす）」等云々。この偈を習い学して、もしは木、もしは石等に書き付けて、身を大鬼神の口になげいれ給う。彼の童子は今の釈尊、彼の鬼神は今の帝釈なり。

薬王菩薩は、法華経の御前に臂を七万二千歳が間ともし給い、不軽菩薩は、多年が間、二十四字のゆえに無量無辺

の四衆に「罵詈毀辱」「杖木・瓦礫而打擲之（杖木・瓦礫もて、これを打擲す）」せられ給いき。いわゆる二十四字と申すは、「我深敬汝等、不敢軽慢。所以者何、汝等皆行菩薩道、当得作仏（我は深く汝等を敬い、あえて軽慢せず。所以はいかん、汝等は皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べければなり）」等云々。かの不軽菩薩は今の教主釈尊なり。昔の須頭檀王は、妙法蓮華経の五字のために、千歳が間、阿私仙人にせめつかわれ、身を床となさせ給いて今の釈尊となり給う。

しかるに、妙法蓮華経は八巻なり。八巻を読めば十六巻を読むなるべし、釈迦・多宝の二仏の経なる故。十六巻は無量無辺の巻軸なり、十方の諸仏の証明ある故に。一字は二字なり、釈迦・多宝の二仏の字なる故。一字は無量の字なり、十方の諸仏の証明の御経なる故に。譬えば、如意宝珠の玉は、一珠なれども、二珠、乃至無量珠の財をふらすこと、これおなじ。法華経の文字は、一字は一つの宝、無量の字は無量の宝珠なり。妙の一字には二つの舌まします。釈迦・多宝の御舌なり。この二仏の御舌は八葉の蓮華なり。

この重なる蓮華の上に宝珠あり。妙の一字なり。

この妙の珠は、昔、釈迦如来の、檀波羅蜜と申して、身をうえたる虎にかいし功徳、鳩にかえし功徳、尸羅波羅蜜と申して、須陀摩王としてそらごとせざりし功徳等、忍辱仙人として歌梨王に身をまかせし功徳、能施太子、尚闍梨仙人等の六度の功徳を、妙の一字におさめ給いて、末代悪世の我ら衆生に、一善も修せざれども六度万行を満足する功徳をあたえ給う。「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」、これなり。**我ら具縛**

の凡夫、たちまちに教主釈尊と功徳ひとし。彼の功徳を全体うけとる故なり。経に云わく「我がごとく等しくして異なることなし」等云々。法華経を心得る者は釈尊と斉等なりと申す文なり。

譬えば、父母和合して子をうむ。子の身は全体父母の身なり。誰かこれを諍うべき。牛王の子は牛王なり。いまだ師子王とならず。師子王の子は師子王となる。いまだ人王・天王等とならず。今、法華経の行者は、「その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」と申して教主釈尊の御子なり。

教主釈尊のごとく法王とならんこと難かるべからず。

ただし、不孝の者は父母の跡をつがず。堯王には丹朱という太子あり。舜王には商均と申す王子あり。二人共に不孝の者なれば、父の王にすてられて現身に民となる。重華と禹とは共に民の子なり。孝養の心ふかかりしかば、堯・舜の二王召して位をゆずり給いき。民の身、たちまちに玉体にならせ給いき。民の現身に王となると、凡夫のたちまちに仏となると、同じことなるべし。一念三千の肝心と申すはこれなり。

しかるを、いかにとしてかこの功徳をばうべきぞ。楽法梵志・雪山童子等のごとく、皮をはぐべきか、身をなぐべきか、臂をやくべきか等云々。章安大師云わく「取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等これなり。正法を修して仏になる行は時によるべし。日本国に紙なくば、皮をはぐべし。日本国に法華経なくて、知れる鬼神一人出来せば、身をなぐべし。日本国に油なくば、臂をもともすべし。あつき紙、国に充満せり。皮をはいでなにかせん。

しかるに、玄奘は、西天に法を求めて十七年、十万里に

至
いたれり。伝教、御入唐ただ二年なり、波濤三千里をへだてたり。これらは男子なり、上古なり、賢人なり、聖人なり。いまだきかず、女人の仏法をもとめて千里の路をわけしことを。竜女が即身成仏も、摩訶波闍波提比丘尼の記別にあずかりしも、しらず、権化にやありけん。また在世のことなり。

男子・女人、その性、本より別れたり。火はあたたかに、水はつめたし。海人は魚をとるにたくみなり。山人は鹿をとるにかしこし。女人は姪事にかしこしとこそ経文にはあ

隔 明

かされて候え。いまだきかず、仏法にかしこしとは。女人の心を清風に譬えたり。風はつなぐとも、とりがたきは女人の心なり。女人の心をば水にえがくに譬えたり。水面には文字とどまらざるゆえなり。女人をば誑人にたとえたり。ある時は実なり、ある時は虚なり。女人をば河に譬えたり。一切まがられるゆえなり。

しかるに、法華経は「正直に方便を捨つ」等、「皆これ真実なり」等、「質直にして意柔軟なり」等、「柔和質直なる者」等と申して、正直なること弓の絃のはれるごとく、墨の

縄打

なわをうつがごとくなる者の信じまいらする御経なり。糞を栴檀と申すとも、栴檀の香なし。妄語の者を不妄語と申すとも、不妄語にはあらず。一切経は皆、仏の金口の説、不妄語の御言なり。しかれども、法華経に対しまいらすれば、妄語のごとし、綺語のごとし、悪口のごとし、両舌のごとし。この御経こそ実語の中の実語にて候え。実語の御経をば、正直の者、心得候なり。今、実語の女人にておわすか。

当に知るべし、須弥山をいただきて大海をわたる人をば

見るとも、この女人をば見るべからず。砂をむして飯とな
す人をば見るとも、この女人をば見るべからず。当に知る
べし、釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏、上行・無辺行等
の大菩薩、大梵天王・帝釈・四王等、この女人をば、影の
身にそうがごとくまぼり給うらん。日本第一の法華経の
行者の女人なり。故に、名を一つつけたてまつりて、不軽
菩薩の義になぞらえん。日妙聖人等云々。

相州鎌倉より北国佐渡国、その中間一千余里に及べり。
山海はるかにへだて、山は峨々、海は濤々、風雨、時にしたが

うことなし。山賊・海賊充満せり。すくすく、とまりとまり、民の心、虎のごとし、犬のごとし。現身に三悪道の苦をふるか。その上、当世の乱世、去年より謀叛の者国に充満し、今年二月十一日合戦。それより今五月のすえ、いまだ世間安穏ならず。しかれども、一りの幼子あり。あずくべき父もたのもしからず。離別すでに久し。

かたがた筆も及ばず、心弁えがたければ、とどめ畢わんぬ。

文永九年太歳壬申五月二十五日　　日蓮　花押

日妙聖人

にちみょうしょうにん